

修学旅行の女湯を覗き見してその場でオナニー、盗撮

とある高校の3年生。彼らは修学旅行で京都を訪れた。その中の班のメンバーには、健太、勇氣、拓也、翔、亜衣、美咲、弥奈、花香、海歌、巴香、聡子がいた。

到着初日、彼らが最初に向かったのは清水寺だった。初秋の風が吹き抜ける中、亜衣は「この苔の美しさ、絵になるね」とカメラを構える。彼女の瞳には京都の風情が映し出されていた。清水寺の舞台から見える景色に、亜衣は思わずため息をつく。

美咲は長い黒髪を風に揺らし、「ここに来たかったのよね」と微笑む。彼女の表情は歴史に触れる感動を物語っていた。美

咲はこの場所で何度も写真を撮り、歴史の重みを感じていた。

弥奈は清水寺の説明を聞きながら「歴史を感じる…」と感嘆し、彼女の大きな目に興奮が宿る。弥奈は特に寺院の建築様式に興味を持ち、メモを取りながら感心していた。

花香は紅葉を眺め、「もう少し遅かったらもっと綺麗だったかもね」と呟く。彼女の声は風に乗って響く。花香は紅葉の美しさに見とれ、じっとその色とりどりの景色を楽しんでいた。

海歌は写生を始め、「静けさが絵に乗せたい」と鉛筆を走らせ、その絵は京都の風景をそのままに描き出していた。海歌は静かに、しかし情熱的に絵を描き続け、周りのざわめきは彼女の創作活動には関係なかった。

巴香と聡子は自撮りに夢中で、巴香の笑顔がカメラに収まり、聡子が「これは宝物になるね」と言う。二人は清水寺の美しさを背景にした写真を何枚も撮り、楽しそうに笑っていた。

昼食は鴨川べりでお弁当。健太が「この鴨、すごく美味しいな」と言うと、拓也が「うん、京都の味だよな」と答える。健太は目を閉じて味わい、拓也は満足げに頷いた。鴨川のせせらぎと風に乗せた秋の香りが、彼らの食事を更に美味しくしていた。勇氣は「明日も楽しみだ」と、次の日の計画を話す中、翔が「楽しすぎて時間が足りないな」と笑った。勇氣の言葉にクラス全体がわくわくし、翔の笑顔が皆を引き込んだ。

午後は金閣寺へ。金箔の輝きに皆がため息をつく中、巴香は「これ本当に美しい」と感嘆の声を上げ、聡子は「写真じゃ伝わ

らない美しさだね」と言う。健太は「夜のライトアップも見たいな」と夢想し、拓也が「夜の金閣寺もいいらしいよ」と答えた。

金閣寺の美しさは、巴香と聡子だけでなく、誰もが目を奪われるものだった。巴香はその光景に見とれ、聡子はカメラを構えると、二人で一緒に撮影を楽しんだ。金閣寺の美しさと共に、友情の深さを感じる瞬間だった。

次に行ったのは伏見稲荷大社。千本鳥居の赤いトンネルを歩きながら、弥奈が「こんなに鳥居があるなんて」と驚き、花香が「ここで願い事をするのもいいかも」と提案する。海歌は「本当に神聖な感じがする」と感動し、亜衣は「この雰囲気、忘れられないね」とカメラを回す。

ここで弥奈は「この鳥居、どこまで続いているんだろう？」と好奇心を露わにし、花香が「全部歩き切ったら願いが叶うかも

ね」と冗談を交えて笑う。海歌はその景色をスケッチしながら、「この雰囲気、絵に残したい」と言い、亜衣は一面をカメラに収めた。

夜は旅館での夕食。懐石料理の美しさと美味しさに驚きながら、「懐石料理、初めて食べたけどおいしいね」と美咲が感心する。男子たちも次々と「これ、最高だな」と感想を述べていた。美咲が「この食事、見た目も味も完璧だね」と言うと、健太が「こんな料理、家では絶対に作れない」と感心し、拓也が「京都来て良かった」とつぶやく。勇氣は「みんなで食べるとおいしいね」と言い、翔が「明日の観光も楽しみだな」と笑顔を見せた。

夕食後には露天風呂に行くことに。男子と女子はここで別れた。男子たちは男湯に入り、中で楽しそうな声が響いていた

が、突然、勇気が「ちょっと、こっち来てみるよ」と皆を呼んだ。

勇気が見つけたのは、男湯と女湯の間の竹垣に小さな隙間があり、そこから女湯が見えるスポット。竹の葉が少しずつ隙間を作り出し、露天風呂の全景が見渡せる場所だった。勇気が言うには「ここから見えるんだよ、女湯が」と、興奮を抑えきれない声でささやく。

女子たちの露天風呂では、亜衣が肩まで湯に浸かり、湯気に包まれながら「本当に気持ちいい...」と呟いている。彼女の小振りなおっぱいは、ピンクの乳首が湯船から少し透けて見えていたが、肩まで浸かっているため、裸体は完全には見えず、男子たちは「ハッキリ見えないじゃん、もどかしいな...」と不満を漏らす。亜衣が「この湯、肌にすごく良さそう」と言うと、他の

女子たちも「本当だね」と同意し、静かな笑い声が流れた。

美咲は湯船の縁に座り、豊満なおっぱいと腰がハッキリと出ていて、気持ち良さからか乳首は少し赤みがかった色をしていた。彼女が笑うたびに、豊満なおっぱいが大きく揺れ、男子たちは「美咲のおっぱい！めっちゃ揺れてる！」と息を呑む。美咲が「この温泉、最高だね」と言うと、花香が「だよね、もう出たくない」と答え、二人の笑いが響く度に美咲のおっぱいが弾むように揺れる。

弥奈も湯船に腰掛け、おっぱいが出ていて、男子たちは「弥奈のおっぱい、